

独学可能な時代
- 多様化する日本語学習歴と授業活動への影響
IMPACT ON CLASSROOM ACTIVITY OF INCREASED SELF-LEARNERS

池田雅美, マサチューセッツ工科大学
Masami Ikeda, Massachusetts Institute of Technology

1. はじめに

インターネットの普及とモバイル・テクノロジーの発達は、外国語学習を取り巻く環境に、様々な変化をもたらした。外国語が身近な存在になった今、言語習得手段の選択肢が広がったのは日本語も例外ではなく、学習者はどこにいても日本語母語話者と容易につながるできるようになった。

これにより、筆者の教える大学での日本語履修者の中にも新しい傾向が見られるようになった。まず、「独学」という選択肢が新たに加わったことで、学習者の学習歴が多様化しただけでなく、独学編入者の数も能力も、ここ数年急上昇している。そして教室内での彼らの存在は、その他の学生及び授業活動に、少なからずの影響を及ぼしているのである。

本稿では、独学経験者へのインタビュー結果と、その他の学生からの意見を総合し、今教室で何が起きているかを解明するとともに、今後予想される問題や可能性、対応策等を考えてみたい。

2. 独学者台頭の背景

2-1. 日本語学習者を取り巻く環境の変化

筆者が大学で日本語を教え始めた20数年前は、いわゆる「ハードコピー時代」から「コンピュータ時代」への移行が進みつつあり、CD-ROMを使ったマルチメディア教材が開発され始めた頃であった(島田2013)が、日本語学習者が入手できる情報源は、依然として教師と教科書、そして教師によって抜粋された視聴覚教材や新聞記事などが中心であった。つまり、決められた場所(教室)で、決められた時(授業時間)に、与えられた内容を、というのが一般的な日本語学習環境だったのである。

ところが、その後のインターネットの急速な普及と、それに続くモバイル・テクノロジーの発達により、言語習得のための手段や選択肢は飛躍的に増加し、「いつでも」「だれでも」「どこでも」自由に日本語の情報を入手、共有、交換できるようになった。それまで手紙や電話に頼っていた通信手段は、より迅速で安価な電子メールやスカイプ、テキストなどに取って代われ、ブログやTwitter上では、面識のない者同士のコミュニケーションが盛んに行われている。

こうして日本語学習者は、あらゆるオンラインツールやモバイル・アプリを用いて日本語の情報を入手することはもちろん、ソーシャルネットワーキングの交流サイトを利用して、その場にいながらにして世界中の日本語話者と実際に交流することができるようになったのである。

2-2. 学習歴変化

日本語学習者を取り巻く環境の著しい変化に伴い、本学の日本語コース履修者の間にも、新たな動向が見られるようになった。当日本語プログラムには日本語1から日本語6までの6つのレベル（各一学期間）があり、日本語1は全くの初心者向けのコースである。本稿では便宜上、日本語1と2を初級、日本語3と4を中級、日本語5と6を上級と呼ぶことにする¹⁾。

かつては日本語コースへの編入者の日本語学習歴といえば、高校や他機関での日本語学習、日本での長期滞在、親が日本人である場合に集中しており、数もごく限られていた。筆者の記録によると、1995年秋学期から1997年春学期までの3年間に、本学の日本語中級コースの登録者は145名いたが、そのうち141名が前の学期からの継続学習者で、編入者は4名のみ（全体の2.8%）であった。彼らは他機関での授業履修、継承言語、長期滞在（幼少時居住、留学）を通して、中級の日本語能力を習得していた。

ところが約20年後の2014年秋学期から2016年春学期までの3年間では、同じ中級コースの登録者143名のうち、14名が編入者であった。これは履修者全体の約1割（9.8%）が編入者であることを示し、20年前の3.5倍にもなっている。また、この間に編入者の学習歴には新たに「独学」という項目が加わった。驚くことに、これらの独学者は、授業を取った経験も日本渡航経験もなく、身近に日本語話者もいない場合がほとんどなのである。

3. 独学者の台頭

誰でも時と場所を選ばず手軽に外国語に接することが可能な時代の到来は、言語教育の場に様々な影響を及ぼしている。最近では、大学で初めて日本語学習を始める初級クラスの学習者でも、日本語について何らかの予備知識を有していることが非常に多くなっている。

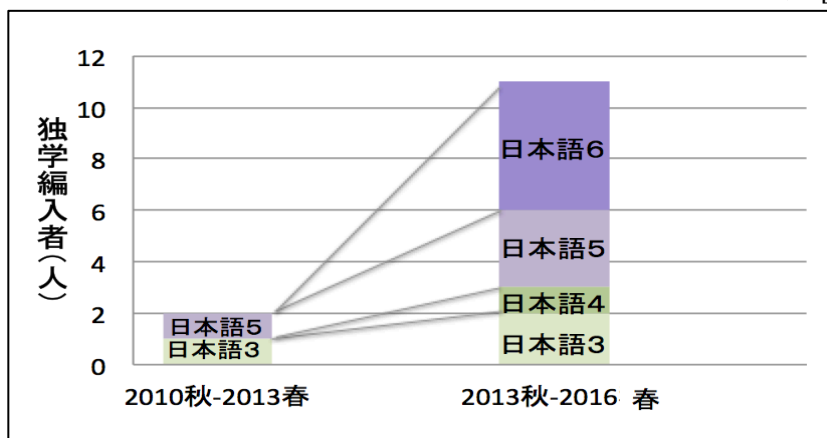
中には、大学での日本語履修前に、正式な日本語学習歴なく受動的知識を超えて、日本語の四技能を習得してしまう者もいる。特に近年、独学のみで上級レベルに達し、驚くほど正確かつ自然な日本語で、流暢に会話をしたり見事な作文を書いたりするケースが急増しているが、以前は想像もできなかったことである。本章では、独学で中級以上のレベルまで習得した学習者に焦点を絞り、近年の傾向を調べてみたい。

3-1. 独学者数とレベルの推移

図1は、過去6年間[2010秋-2016春]に本学の日本語プログラムの中上級コースに編入した独学者の数とレベルである。前半の3年間と後半の3年間で大きく異なっているが、どのレベルもこの期間の登録者総数には大きな変化がなかったことから、クラス全体における独学編入者の割合が比較的短期間で急増し、その日本語能力レベルも飛躍的に上昇したことがわかる。

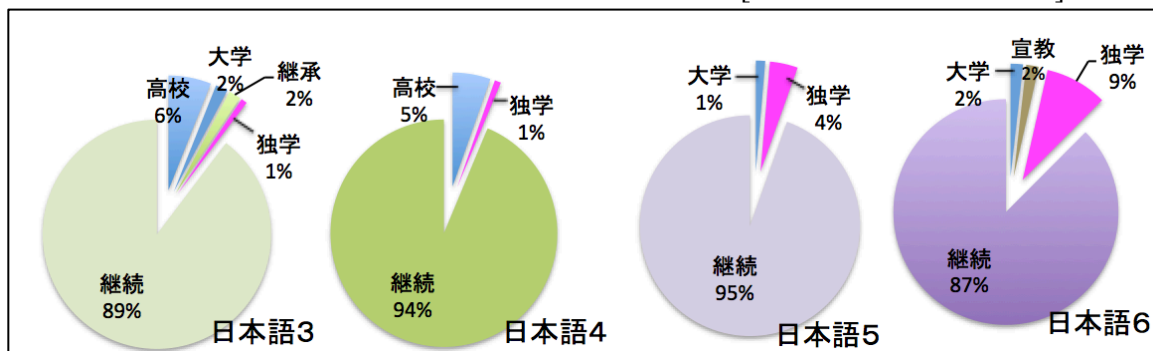
¹⁾教科書は、2010年までは初級から上級クラスまで“*Japanese: The Spoken Language Part I - III*”を使い、それ以降は初級・中級で『げんき I, II』を、上級では『上級へのとびら』を使用している。

図1 独学者数とレベル（日本語授業への編入時）の推移 [2010 年秋 – 2013 年春]



次に、独学編集者が急増した2013年秋から2016年春までの3年間の、各レベルにおける独学者の割合を見てみよう。図2上で独学者を示すピンク色の部分を見れば明らかなように、クラスのレベルが高いほど、独学者がクラス全体に占めている割合が大きくなっていることがわかる。

図2 レベル別：クラス全体における独学者の割合 [2013 年秋 – 2016 年春]



3-2. 独学：2つのタイプ

独学者は、それぞれが独自のやり方で自由に言語習得に取り組むが、本学の日本語コースに編入してくる独学者は、大きく2つのタイプに分けられる。全くの初心者から始める「0からスタート」タイプと、本学の初級コースで日本語学習を始めた後、休暇中に次のレベル内容を独学し、その後中上級コースに編入する「飛び級」タイプである。スケジュールの都合で日本語の授業が継続して取れないことが「飛び級」を目指す主な理由であった以前に比べ、近年では、授業の進度よりも速く日本語を習得して、短期間で上のレベルに進級するために、独学による「飛び級」を選ぶ学習者が増えている。大部分が一学期分または一年（二学期）分の「飛び級」だが、中には一年半（三学期）分の授業内容を独学し、上級後半のレベルに編入した者もいる。

4. 独学者へのインタビュー

では、独学で中上級レベルに到達した者は、どのようにして日本語を習得したのだろうか。そして、独学できる者が日本語の授業を取る目的とは何なのだろうか。それらを解明するため、過去6年間の該当者12人（「0からスタート」独習者8人、「飛び級」独習者4人）のうち11人（同7人／4人）に対し、個別インタビューを行った。

4-1. 「0からスタート」vs. 「飛び級」

まず表1は、彼らの日本語学習の動機、学習期間、内容、使用した教材をまとめたものである。

表1 「0からスタート」vs. 「飛び級」

	0からスタート	飛び級
動機	<ul style="list-style-type: none"> ・趣味（アニメ・音楽など） ・好奇心 	<ul style="list-style-type: none"> ・スケジュールの都合 ・もっと速く学びたい
学習期限	決まっていない	次の学期・学年開始まで
学習内容	興味・好みに応じて	スキップするコースの内容
教材	自由に選択 <ul style="list-style-type: none"> ・映像（ex.アニメ） ・音声（ex.歌） ・スカイプ ・オンラインツール ・スマホアプリ ・SNS (Social Networking Service) 	指定の教科書と副教材

注：インタビューによると、「飛び級」独習者の半数は、教科書の内容に加えて、自分の興味のある教材も自由に勉強していた。

この2つのタイプの「0からスタート」と「飛び級」独学者は、全ての項目において異なっている。日本語学習の目的や期限、内容が比較的明確に定められている「飛び級」タイプに対して、「0からスタート」タイプは計画性や到達目標のようなものが、不明瞭である。ほぼ全員、中学生から高校生で独学を始めたらしいのだが、はっきりとしたきっかけや学習開始の時期は覚えておらず、「気がついたら」やっていた、というパターンが非常に多い。にもかかわらず、彼らは独学で日本語の四技能を習得して中上級レベルに達し、正確かつ自然な日本語で、会話をしたり作文を書いたりするのである。一体彼らはどのように日本語を習得しているのだろうか。

4-2. 習得方法

この疑問を解くために、「0からスタート」して中上級レベルに到達した独習者7名の日本語習得方法を調査したところ、実に様々な手段を試みていることが分かった。表2はその結果をまとめたものである。

表2 日本語習得方法：「0からスタート」独学者（中上級編入 7名）

何を	どうやって	ポイント
アニメ ドラマ 映画 (5人)	1. 字幕見ながら繰り返し見る（字幕なしでもわかるようになるまで） 2. 知らない文法・単語は調べ、覚える 3. 発音・イントネーションを真似ながら台詞を覚える	とにかく覚える
歌（2人）	1. 歌詞を見ながら繰り返し聴く 2. 意味を調べながら文法・単語覚える 3. 歌えるようになるまで何度も練習	とにかく覚える
独り言（2人）	1. 家や寮で、独り言を日本語で言う 2. 分からなくて気になる時は調べる	日本語で考える習慣をつける
Siri（1人）	1. Siri に日本語で話しかける。 2. 認識されない場合は、文法・単語・発音・イントネーションなどを確認	通じる日本語かどうか実際に話してみる
インターネット (7人)	・学習ツールで単語・文法学ぶ ・ブログなどを読み、コメントする ・日本人とメールやスカイプで連絡	・暗記には SRS (Spaced repetition system) 推奨 ・生の日本語に触れる
スマホアプリ (7人)	・学習ツールで単語・文法学ぶ ・アプリ上で一緒に勉強する友達を探して情報共有・教え合い ・アプリのランキングを励みにする	・自分に合うアプリを見つける ・学習コミュニティに参加
SNS（7人） ・Facebook ・Twitter ・Instagram ・Snapchat ・Line	1. 同じ趣味の日本人を見つける 2. 相手のコメントを読む 3. 自分のコメントを投稿する 4. 分からない単語は調べて覚える	・日本人の友人作り ・日本語（母語）話者とのつながり ・日本語でのコミュニケーション

注：SNS（Social Networking Service）には、敢えてインターネットやスマホアプリから独立した項目を設けた。

「0からスタート」した独学者には、「なんとなく」触れ始めた日本語に、「いつの間にか」没頭していたというパターンが多い。彼らにとっては日本語は「学習」というより「趣味」という位置づけであり、かなりの時間と労力を日本語習得のために費やしていながら、学習しているという実感さえない場合が多いようである。

4-3. 独学成功者の共通点

外国語習得能力には個人差があり（白井 2008）、学習期間の長さと言語能力は必ずしも比例しない。しかし、独学のみで日本語の中上級レベルに達した者の間には、いくつかの共通点がはっきりと観察される。以下にその考察を記す。

1) 好きこそ物の上手なれ

独学者は日本語を「学習」しているという意識が薄く、むしろ自身の好奇心や興味が強い動機となって、日本語習得を「趣味」と位置づけ楽しんでいる。

2) 継続は力なり

同じアニメを繰り返し見たり、台詞を全て暗記したりするには相当な時間と努力が必要である。独学者はそれに加えオンラインツールやスマホアプリを使った単語や文法の学習も、根気よく地道に続けている。

3) 大量のインプット→アウトプット

独学成功者の多くは、まず膨大な時間を使って徹底的に日本語をインプットしている。聴解力を極めるにつれ、徐々に必要に応じたアウトプットが容易にできるようになるようである。

4) 柔軟性

独学者は、日本語を分析したり他の言語と比較したりせずに、丸ごと吸収しようとする柔軟性がある。アニメの台詞を丸暗記するのも、その一例である。また、生の日本語をそのまま受け入れて、自然な日本語を身につけようとする意識も非常に高いと言える。

これらは白井（2008）が論じた外国語習得方法の多くを裏付けているが、今の独学者は上記の4点に加え、いつでもどこでも、僅かな隙間時間でも、スマホ片手に学習アプリを利用したり、交流サイトで日本語話者とつながったりしながら、とことん日本語の環境に身を置いて「趣味」に没頭するのである。

5. 独学者の授業参加

本学における近年の日本語独学編入者の急増とレベルの飛躍的向上は、先に述べたとおりだが、自ら高レベルの日本語を習得することができる独学者が、どのような目的で日本語の授業を取るのかは、今まで確認する機会がなかった。

5-1. 独学できる学生が大学で日本語の授業を取る理由

独学で日本語を中上級レベルまで学べる学生は、なぜわざわざ授業を取るのだろうか。そして、授業活動に何を期待しているのだろうか。

図3 独学者が大学の授業を取る理由（複数回答可）

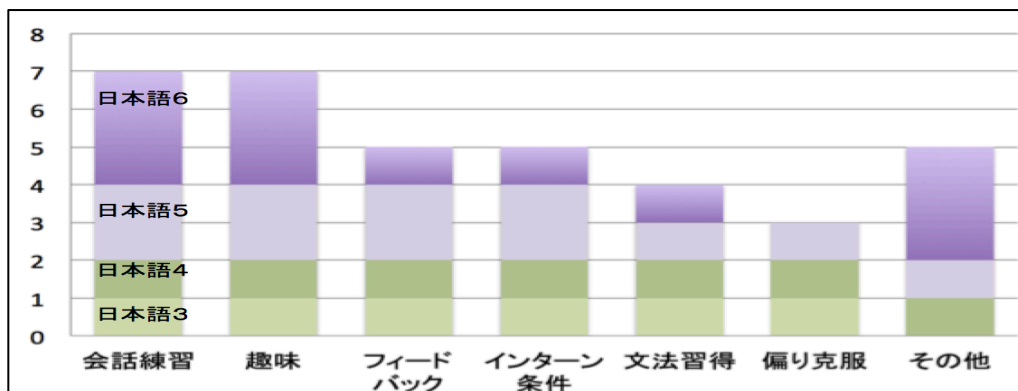


図3が示すように、この問いに対しては7名全員が「会話練習のため」「趣味として」と回答した上で、それぞれが他の複数の項目を挙げた。「フィードバックを得るため」「日本でインターン参加の条件を満たすため」「文法習得」「弱点の克服」などであるが、「その他」の理由として「自信をつけるため」や「日本語副専攻のための単位取得」などもあった。

5-2. 授業履修後の感想

では、実際に履修した日本語の授業は、独学編入者にとってどんなものだったのだろうか。授業参加の長所と短所を聞いてみた。

まず、授業を取ってよかった点として、1) 会話練習やディスカッション；2) 教師によるフィードバック；3) 言語能力の偏り克服；4) 思い込み・癖の矯正；5) 基礎の学び直し；そして6) 自分の日本語に自信がついたこと、が挙げられた。

その一方で、授業に不満を抱いた独習者もあり、1) 授業内容が簡単すぎる；2) 授業の進度が遅い；3) 興味のないことにも取り組まなければならない；そして4) クラスの学生間の日本語能力の差が大きすぎるなどがその理由であった。

後の章でも触れるが、独学者の増加が進むにつれ、これらの不満要因については、慎重かつ迅速な対応を行う必要があるだろう。

6. 授業への影響

さて、独学者が日本語の授業に入ると、教室内ではどのような変化が起きるのだろうか。そしてそれが、授業活動にどのような影響を与えるのだろうか。

6-1. 教室内での独学者の存在

まず、教室内での独学経験者はどのような存在なのか。これについては正式なインタビューやアンケートを施す機会がまだないのだが、オフィスアワーなどの複数の学生との会話を総合すると、独学編入者以外の学生が彼らに対して抱く印象は、その学生自身の成績によって大きく異なるようだ。

というのは、クラス内の成績上位者は概ね、独学編入者の存在を好意的に捉え、自分の日本語学習にとって「いい刺激」かつ「励み」になると考えているのに対し、成績下位者の多くは、授業での未習事項を既に知っている独立学習者がクラスに在籍することを不公平だと感じ、彼らは自分を萎縮させる「怖い」存在だとみなす傾向にあるからだ。そしてその間の成績中位者は、独学者を「すごい」と認めながらも、特に何も影響を受けることはなく、傍観的な立場であるようだ。

6-2. 学生間のレベルの差と授業活動への影響

いつの時代にも、授業には学習者間レベルの差がつきものであったが、近年の独習編入者増加はこの差に拍車をかけ、授業活動にも大きな影響を与えている。独学編入者は授業と並行して授業外で独学を続け、学期中も加速度をつけて日本語が上達していくため、授業が進むにつれ、クラスメート、とりわけ授業で伸び悩んでいる学習者との間には差が開くばかりだからだ。

こうしてかつてないほど両極端なレベルの学習者が混在する教室では、従来の教室活動が成立しにくくなる。例えば、レベルの違いすぎる学習者間ではペアやグループによる練習や会話が成り立たず、両者の苛立ちや萎縮が表面化することがある。また、授業中に伸び悩みの学習者が指名される度に質問の繰り返しと沈黙で授業の流れが中断してしまい、そのような学習者の割合が高いクラスでは、それを不服として、独学者や成績優秀者が授業をやめてしまうこともある。学習者間のレベルの差が小さくなったという点では、授業が行いやすくなりそうなものだが、優秀者不在となったクラスでの教室活動は、ごく基本的で単純な、発展性のないものに限られてしまうことが多い。レベルの差は小さくなくても、引っ張る存在がいないため、学生は皆現状に甘んじ、伸びていかないのである。

このように、独学編入者の登場により、クラス内での日本語能力の差や学習者間の心理的な対立が以前にも増して大きくなり、それが教室活動にも影響を及ぼしているのが現状である。

6-3. 今後起こり得ること：避けたいシナリオ

今後も恐らく独学者はますます増えていくだろう。技術の発達とともに独学できる環境もさらに改良が進めば、独学だけで十分に日本語習得が可能になり、授業参加に意義を見出せない者が多くなるかもしれない。これは、授業を途中でやめていく独習編入者だけではなく、そもそもはじめから授業を取ろうとせずに、独学のみを選択する者も増えるという意味である。そうすると日本語コースの登録者の減少につながり、プログラム存続の上でも大きな懸念となるだろう。

7. 対応策と今後の課題

このような事態を避けるためにも、独学可能な時代への対応を迅速に行う必要があるだろう。本章では、その可能性と今後の課題を述べる。

1) 能力別クラス編成

近年、中上級コースの独学編入者及び成績上位者から、レベル別にクラス分けをしてほしいという要望の声が高まっている。確かに学生間の心理的な対立を解消し、同等の能力の者同士で効率的に日本語学習を進めるという点で、能力別のクラス編成は効果があるかもしれない。但しこの対策は、成績上位者へのメリットは大きいですが、前章で述べたように下位レベルでは「引っ張る学生不在」によるデメリットが生じる可能性がある。

2) 個別指導

本学の上級コースでは個別指導が既に一部導入されている。全員で行う授業に加え、学生は自分の興味に応じたトピックで課題に取り組み、授業外時間に教師と面談する。学生のオートノミー育成のためにもこのような自律的学習は効果がある（青木 2013）が、学生数が多いクラスの授業と並行して行う場合、教師の負担はかなり大きくなる。一方初中級では、現在個別指導が行われているのは伸び悩みの学生や成績下位者に集中しており、オフィスアワーなどの授業外時間に口頭練習や文法の復習をすることで、学生間のレベルの差の縮小を図っている。

3) 独学者の学習法から採り入れられること

能力別、個別の対応には一定の効果は期待できるが、クラス全体を考えた場合、理想的なのは、様々な能力の学習者が「混在」するクラスで、互いに学び合える環境を作ることではないかと思う。学習者間の能力差が大きく、興味も異なる者同士が集まるクラスでこれを達成するのは容易ではなさそうだが、独学の成功の鍵である「動機」と「主体性」の高さ、「学習者オートノミー」を、クラス全員が持てるような環境を整えるにはどうしたらいいかを考えなければいけないだろう。まずは同じ興味を有するグループを単位にしたコミュニティ作りを目指し、教師不在の状況下で学習者が主体性を持ちグループ課題に取り組める環境を提供（池田・生路 2012）しつつ、教師はアドバイザーという役割を担う（青木 2013）ことで、学習者間の学習コミュニティを構築、サポートできるかもしれない。

4) 学習者のニーズ調査

教師が把握しているより、実際の独学者人口は遥かに大きいと思われる。特に初級前半（日本語1）はプレイスメントテストがなく、登録は自己のレベル申告のみであるため、学習者の学習歴についての正確な状況把握は困難である。そこで今後は、初級の学期始めに、独学も含めた学習歴の有無に関する調査を行いたい。また、授業を途中で辞めた独学編入者、成績上位者、伸び悩み学習者にもアンケートを行い、なぜ辞めたのか、どのように違っていたら授業を取り続けていたのかを解明することにより、今後の授業活動のあり方の見直しと改善が促されるだろう。

5) 上級レベルの強化

独学可能な時代の到来で、確実に上級者コースのレベルが上がっている現状と、近年の学生からの、日本語4年目コースに対する要望の高まりを考え合わせると、現在の上級コースの内容と活動をそのニーズに合わせて強化・調整していく必要があるだろう。4年目コースの新設については何度か検討がなされたが、諸々の事情で今のところ実現には至っていない。

8. 結論

恐らく今後も独学者はますます増え続けることが予想される。そして、この新しい時代の中で、新たな課題に直面し、試行錯誤を重ねている日本語教師も大勢いるのではないかと察する。しかし膨大な情報の中から、誰でも自分の興味に応じた情報、役立つ情報を効率的に入手できる時代になった今こそ、教師にとっては学習者オートノミーを育成する絶好のチャンスであろう。既にオートノミーを身につけている独学者と、その他の学習者が同じ教室で学び合い、教え合えるような環境作りのために、今後は学内のみならず、学外の動向にも目を向け、他機関と連携してこの問題に取り組めればと思う。

参考文献

- 青木直子 (2013) 『外国語学習アドバイジングープロのアドバイスであなただけの学習プランをデザインするというもうひとつの方法』 Kindle 版
- 池田朋子・生路茂太 (2012) 「教師不在の学習の「場」が学習者の主体性に及ぼす影響」 『日本語教育実践研究フォーラム報告』
http://www.nkg.or.jp/kenkyu/Forumhoukoku/2012forum/2012_P12_ikeda.pdf
- 島田徳子 (2013) 「未来の学習環境」 『季刊 Ja-Net』 65
<http://www.3anet.co.jp/wp-content/uploads/2013/08/Ja-Net65.pdf>
- 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学-第二言語習得論とは何か』 岩波書店